放課後のエイリアン

みねお涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
放課後のエイリアン

【Ｎコード】
Ｎ３５３３Ｎ

【作者名】
みねお涼

【あらすじ】
その日キクカは、本屋へと急いでいた。
欲しい本の為、塾の帰り道、夜の繁華街を1人歩いていた。
そこで偶然目にしたのは、同じ学校の有名人、アヅマの姿。
狭く、ホコリっぽい路地裏で。
見知らぬ大人の男たちを相手にケンカしている同級生の姿。
怖くなって逃げ出したキクカ。
翌日、目撃者であるキクカのもとへ、アヅマが現れ…。
キスで文字通りの口封じをされてしまい…！？

プロローグ

プロローグ

そこは、切り取られたかのように、表通りから隔絶された空間だった。
埃っぽい、いかにも悪そうな取引が行われそうな、そんなイメージ。

夜。
２１時を回っていた。
まだ、眠れない時刻。
キクカは、塾からの帰り道を少し迂回して、欲しかった本を買いに行く途中だった。
チェック柄の、短い制服のスカートをひらめかせ、足早に書店を目指していた。
仕事帰りのＯＬを勧誘する若手ホストたちを横目に見ながら、彼女は歩く。

ふと。

何かが見えたような気がした。
テナントがひしめくビルとビルの間。
申し訳程度に口を開くわき道。
ショップの通用口や、レストランのごみ置き場が道を占拠して、人一人がやっと通れるくらいの細い。

ネオンのきらめきが、微かに届く場所。

キクカは、左手にはめていた腕時計を確認する。

――まだ、大丈夫。あと2時間…。
目的の書店の閉店時間を記憶から引き出し、一人決心する。
キクカは、建物の縁に手を沿えて、慎重に足を進める。
肩に下げていたバッグを胸の前で抱えて、前を見て、進入する。
すると。

何人かの話し声が耳に入った。
はっきりとは聞き取れないが、何か叫んでいるような?怒っているような?
――…なに?もうちょっと…。
キクカの好奇心に、いそう火がついた。
そっと、声のするほうを伺う。

そこにいたのは数人の男。
視界に飛び込んできたのは、鮮血の飛沫。
聴神経が伝えるのは、男たちが殴られ、悶絶する声。
自分よりも体格のいい男たちをねじ伏せているのは、同じ高校の制服を着た生徒。
――あたし、見たことある、あの人。
目の前で繰り広げられる光景が疑わしく、それでも恐ろしくて、キクカは後退する。

ガサ。

放り捨てられたコンビニのビニール袋が…。

「誰だ!?」

キクカは、振り返ることなく全力疾走していた。

‥‥‥
「ねぇ、キクカ！深槻左九夜の新刊買ったのぉ？」
――ミツキ・サクヤ？
翌日、学校でのこと。
同じクラスの友人、佐々木洵子は机に伏せて顔を上げようとしないキクカに声をかけた。
「あぁ！！忘れてた！！」
”深槻左九夜”の名を聞いて、キクカは勢いよく上体を起こした。
「忘れたって。あんた何のために遠回りして本屋行ったのよ？」
洵子は、あきれたと言いた気に肩をすくめた。
「……いや、だって。あのね、聞いてよ洵ちゃん！」
昨晩、キクカは新進気鋭のファンタジー作家、深槻左九夜の最新刊を買いに行くはずだったのだ。
発売日に買わずして、どうしてファンを語れようか。
「昨日街歩いてたらさ…」
「オバさ～ん」
キクカの声に被さるように教室内に響く呼び声。
「オバさんいますか～？」
その声を聞いて、キクカの顔が見る見るうちに赤くなる。
それはもう、耳まで。
「…あれ。呼ばれてんよ？キクカ」
教室の、後方のドアから顔を出し、「オバさん」と連呼する男を見ながら、洵子はニヤニヤと笑う。
キクカは、座っていた椅子から立ち上がり、つかつかと男のほうへ近づく。
クラス中の生徒が、彼女と、彼女を呼ぶ男に注目していた。
「？あ、オバさん」
男は、キクカの顔を確かめて、にっこりと笑った。

「オバサんって呼ぶの、やめてくれませんか！？」
少し強い語調で言ってやった。
「へ？だって苗字…」
「た・し・か・に！あたしの苗字はオバですけど！」
キクカは、胸ポケットについているネームプレートを指し示しながらさらに言い返す。
「そう呼ばれるの、恥ずかしいのよ！更科くん！」
彼女の名前は、木場菊香と書いてオバ・キクカと読む。
「ご先祖様に、失礼だよ？」
男、更科アヅマは笑顔のままでそう言った。

更科アヅマ。
彼はこの高校ではかなりの有名人だった。
おかげで、隣を歩くだけでも女子の羨望の的だ。
「あの、どこ行くんですか？」
顔をこわばらせたまま、キクカは尋ねた。
「…誰にも聞かれたくない話なんだよね。…てか、さ？なんで敬語？俺同い年なんだけど…」
「そ、それはっ…」
赤面し、ブツブツとつぶやくキクカを、アヅマが覗き込む。
「あ。俺のこと好きとか？」
しかも、いたずらっぽく微笑んで。
「違いますっ！！」
キクカは、それはもう思いっきり否定した。

アヅマは、入学式で新入生代表挨拶の資格を得た。
すなわち主席合格。
今でも、そのルックスからは到底想像できないが、学年トップをキープしている。
うわさで、問題を盗んだなどとまで言われたくらい、そこらの男子

高校生となんら変わらない。
ピアスもあけていたし、制服も規定どおりに着ていない。
髪も若干染めていたし、テレビアイドルなんか目じゃないくらいに端正で美形だ。
教諭たちも、学校側も、彼が成績優秀者だから、強いて矯正はしなかった。
その外観からも、成績の上でも、キクカは彼を敬遠していた。
敬遠されるだけの、雰囲気を持っていた。
連れられて来たのは人通りの少ない研究棟の裏だった。
たまにある化学や物理などの理科系の教室と、同じく選択教科の芸術系授業の作業教室がある。
２階建ての、小さな建物。
「こんなところで一体何するつもり！？」
内心かなりびくつきながら、虚勢を張るキクカを見て、アヅマは相変わらず笑っていた。
「別に、襲おうとか思ってないけど・・・？」
「あたりまえよ！そんなことしたらばらしてやるんだから！」
キクカは、勢いに任せてとんでもないことを発言してしまったことに気づき、顔面蒼白になる。
一気に、汗が噴出した。
「あー…俺が聞きたいのはそこなんだよねぇ？」
今にも心臓が飛び出てしまいそうなくらい、拍動が大きくなった。
どこかひょうきんだったアヅマの顔が、見る見るうちに険しいものになる。
「あの、なにも、見てないから」
「あのさ、その発言自体が見たっていってるのと同じだって気づかないわけ？」
しまったと。
いまさら思っても仕方のないことではあるが、後悔せずにはいられなかった。

耳の後ろで、心臓が脈打つ。
鼓動が、すべての音をさえぎってしまいそうなくらい、はっきりと。
「昨日、何を見た？俺にあんな脅しをかけるくらいだから、俺のことははっきり見たんだろ？」
アヅマは、さらにキクカに詰め寄る。
「何を、見た？」
「あんたが人を殴ってるところよー！！」
キクカは、開き直って大声で叫んだ。
「な、なにもどならなくったって…」
半ば呆れたようにアヅマが耳を塞でいた。
「いいじゃないのー！もう、これで満足なんでしょうっ！？」
キクカは、それでも恐怖心からか、声を張り上げる。
そうしないと、「自分」が保てない気がしていた。
目の前の男が、怖くて、逃げ出したいのに、足が震えて動こうとしない。
「…やっぱり…。ごめん、あまり巻き込みたくはないんだけど、見たならしょうがないな」
納得して、大きく息を吐いたアヅマが、腕組みをして思案していた。
「は…い？」
彼の言動の意味を取りあぐね、キクカは間抜けな返事をする。
「これから一週間、俺と一緒に行動してくれない？」
問答無用ね、と付け加えて、アヅマはキクカの肩をたたく。
たたかれた当の本人は、それでもなにがなんだか理解できなくて、目をぱちくりさせていた。
「え？なに、どういうこと！？」
声が、自然と大音量になる。
「だから、そのまんまの意味だよ？オバさんの行動は俺が制限させてもらうから、そのつもりで」
「なんでぇ！？」
「昨日の場面を見られたからには、ほっとけないってこと」

「なんでよ！」
「あのさ、俺にとってあれは見られたくないことだったわけ」
「じゃぁ、口封じでも何でもすれば！？」
「ん？」
その時。
少し高い位置にあったアヅマの顔が傾く。
――え？
キクカがその行動の意図を考える間もなく、アヅマの唇が、キクカのそれを塞いだ。
硬直。
どれほど時間がたったのか。
おそらく、数秒にも満たなかったはずだ。
しかし、キクカの時間の感覚は狂ってしまっていた。
「はい、口封じ」
満足そうに笑むアヅマの顔も、はっきりとは見えていなかったに違いなかった。

へなへなとその場に座り込んでしまったキクカに、アヅマは間髪いれずに言葉をかけた。
「オバさん！腰抜かしてる場合じゃないよ！」
彼女の腕を掴んで、上体を引き起こす。
「放課後、また迎えに行くから」
「…え」
「それまでおとなしくしててね」
にっこり。
何が、起こったのか。
瞬きの次の瞬間。
キクカの意識は遠のいていた。

異世界への誘拐1

目を開けると、見知った天井がそこにある。
独特の消毒液臭さ。
乳白色のカーテン。
硬いベッド。
保健室だ。
布団をはぎ、リノリウムの床に足を下ろすタイミングで、カーテンの向こうから声がかかった。
「オバさん、更科くんに誘拐されたって噂になってるわよ」
保健の先生だ。
カーテンを開けると、興味深そうに笑っている。
「似たようなものですが…」
「あら、ここに運んでくれたのも更科くんなんだから、正義の味方じゃない？」
「今、何限ですか？」
「もう、ホームルームが終わりそうな時間ね」
放課後、ということか。
研究棟の裏で宣言された通り、迎えとやらに来るのだろうか。
その前に、逃げなければ。
「逃がさないよ」
ギクリと身体がすくむ。
更科アヅマがいつの間にか保健室に現れていた。
ドアが開く気配はなかった。
では、最初からここに居たということか。
「時間がないんだ、すぐに出発しよう」
「え？えぇ？何それ！」
キクカはアヅマの顔を見上げた。
「どこに！？」

キクカの質問などお構いなしに、アヅマは何かぶつぶつとつぶやいた。
徐々に、アヅマの髪の毛がふわふわと揺れだす。
まだしも、それらは微細な光を発している。
見ると、アヅマの全身が同じような状態になっていた。
「なんなのよ、一体ー！？」
今にも号泣してしまいたい位に、キクカの顔がゆがむ。
「うふふ、やっぱり王子様は誘拐犯かしらね～」
のん気な保健医のせりふが、妙にひっかかる。
――ちょっと！これは怪現象なんじゃないの！？
次の瞬間、キクカはまぶたを強く閉じていた。
眩いばかりの光と、ジェットコースターの急降下に似た浮遊感と内蔵の引きつる感覚がそれをさせた。

「ついたよ、オバさん」
「だ～か～ら～…」
懲りずにキクカを苗字で呼ぶアヅマに、抗議しかけたキクカの語尾がうやむやになる。
「は？」
「は？じゃなくて、他に言うことはないの？」
飄々と。
半ば面白そうに、アヅマはキクカの反応を見る。
「あの？ここは“ブルテンツ”か何かですか？」
口を突いて出たのは、深槻左九夜の小説に出てきた異世界の地名だ。
――今まで校内にいたはずなのに。
キクカとアヅマの目の前には、暗く厚い雲に覆われた、湿度の高い、森林地帯が広がっている。
人間の手など、まったく入っていないことは、その様相より何より。
「ギャァッ。ギャァァァッ！」
小説や、マンガの中でしか見たことがないような奇怪な生物が空を

飛んでいる。
それで十分に理解できた。
「“ブルテンツ”かぁ。まぁまぁいい線だね。ここは“ラグノリア”だよ」
アヅマは、驚く様子さえ見せずに、キクカの答えを訂正した。
それもやはり、深月左九夜の小説に出てくる異世界の地名だった。
「正式には”ヅギュツィテンタンイェルコウナゥラグノィーリア”」
舌をかむ以前に、発音すらよくわからない韻が並ぶ。
「日本語ではちょっと発音が難しいし、長いから俺は単に”ラグノリア”と呼ぶけど」
アヅマは、呆然と世界…ラグノリアを見つめるキクカに言った。
その説明に、キクカははっとしてアヅマに視線を移した。
「あなた、もしかして、深月先生！？」
「あー。いや、俺はあの人に情報提供してるだけ」
アヅマは、今までとは打って変って爛々と瞳を輝かせる少女を落胆させた。
「…なんだ、つまんない」
「つまんないってオバさん…、俺があの変人小説家と同一人物だったら面白かったのか…」
呆れてため息をつくアヅマに、キクカは揚々と語りだした。
「変人とはなによ！」
ファンタジー界に新風を巻き起こした小説家のすばらしさの数々を。
「あの表現力と世界観は眼を見張るものがあるのよ！」
「その世界観を与えたのは俺なんだけど」
そうアヅマが言うのも、まったく聞こえてないようで…。
「ってゆっか！あなたのせいで最新刊買いそびれちゃったじゃないの！どうしてくれるのよ！」
思い出したかのように人差し指をアヅマに向けた。
「……勝手にしてくれ…」
アヅマは完全に呆れていた。

キクカがアヅマとともにラグノリアに到着したころ。
当の学校では。
「木場と更科が消えた〜！？」
どう考えても接点のない二人の失踪に、生徒も教諭も保護者側も浮き足立っていた。
その渦中で一部女性徒たちが、学校側に呼び出されたアヅマの保護者に向けて、黄色い歓声をあげていた。
その人物は…。
「深月左九夜だぁ！？」
洵子が、アヅマのクラスの女性徒からの情報に、嬉々として校長室に走ったのは言うまでもない。

校長室では、キクカの両親と、深月左九夜――本名、三月恭介が学校首脳陣と応接台を囲んでいた。
「失礼ですが、三月さんは更科君とはどういったご関係で…？」
アヅマの担任教師が三月に尋ねた。
「実は、捨て子だったあの子を僕が拾いましてね…」
２０代は半ば過ぎといった感のある三月は、さも切なそうに切り出した。
「最初は僕もまだ学生の身で、仕事のほうも始めていませんでしたから、施設に預けたのですが…」
「結局お引取りになられた…？」
「はい、仕事も軌道に乗りましたし、あの子のおかげで生きがいが出来ましたから」
三月はそう言って笑ったのだった。

「今日から地球時間にして一週間、俺の言うことをちゃんと聞いてね」
アヅマが話題を切り返した。

「え？」
今まで元気いっぱいだったキクカの顔が翳った。
「俺は、これから一週間、逃げないといけないから」
見る見るうちに不安の色を濃くするキクカに、アヅマは付け加えた。
「どういうこと？ちゃんと説明してくんなきゃ分からないわ…」
アヅマの暴行現場を目撃してしまったからといって、こんなところに連行される謂れはない。
日本のどこかならまだしも、ここは俗にいう異世界だ。
キクカには、ここが異世界だということしか、明確になっていないのだから。
「あなたは、何者なの！？」
忘れかけていたアヅマへの畏怖が、いまさらながらに蘇ってきた。
「そうか、それから話さないといけなかったね」
アヅマは、少し反省した風を見せ、キクカに対峙した。
「俺は、１０年前に地球に流されて、恭介…深月左九夜に拾われたんだ」
今度は、キクカも深月の名に反応することはなかった。
「流されたって、どこから？」
キクカは、一つの可能性を頭の隅に置きつつ、簡潔に聞いた。
「この世界…。そう、オバさんたちには”インテュバル”という名で知られる異世界だよ」

「僕には、あの子の紡ぐ異世界の物語が必要なんです」
集まった面々が異口同音に疑問符を投げかける中、三月は自分の作品に隠された裏話を始めた。
「みなさんは、僕の小説を読まれたことがないでしょうが……」
「壮大な異世界ファンタジーですよね？」
口を挟んだのはキクカの母親だ。
「娘はあなたの本を全部持っておりますのよ」
「それは光栄です。……そう、僕の書く物語は”本物の異世界”と

賞賛されました」
校長を始め、教諭たちは三月の自慢話に正直辟易といった様子だった。
だが、次の三月の言葉で「おお」と感嘆と、驚愕の混ざった声を上げた。
「しかし、あのアイディアはすべてアヅマのものなんですよ」
校長室と扉一枚隔てた廊下側で、旬子たちも驚いていた。
あの小説が、同じ高校生の、更科アヅマの生み出したものだったとは。
「あの子は、まるで見てきたかのようにいろんな世界の話をしてくれました」
もしかしたら……と三月は続ける。
「アヅマは、この世界の人間じゃなかったのかもしれない…」

「この世界で、戦争が起こったのは俺がまだ小さい頃だった……」
キクカは、アヅマの言葉を黙って聞いていた。
「俺は、戦争が悪化しようとしていた１０年前、危険から逃れるために脱出させられたんだ」
「……なんで、あなたが逃げないといけなかったの？」
「俺が、この世界を統治するモノの後継者だから、とでもいうのかな」
その時、アヅマの表情が悲しみの色に変わった。
故郷を、幼い頃の記憶を、懐かしむように。
「あなたは、宇宙人か何かなの？」
「…どうなんだろう、厳密には違うんだけど」
「なんで、私は連れてこられたの？」
「オバさんが見たのは、俺を殺しにきた刺客だったんだ。戦争してる、敵のね」
二人の周りでは、相変わらず獣の咆哮らしき声がこだましていた。
日が差すこともなく、風が雲を運ぶこともない、湿った大地。

暗雲は、じっと、ただ世界を包囲している。
「オバさんは、彼らの姿を見てしまった…。これは俺のミスにつながり、ひいては地位の剥奪を招く」
アヅマは、真剣なまなざしでキクカを見据えた。
「この世界を救うため、あんたに秘密をばらされないように俺が監視したいんだ」
「理由になってないわよ！」
異世界だの、戦争に後継者だの、刺客や秘密だの、キクカには処理できないほどの特異な情報。
憤り以外に、キクカの心を満たすものはない。
「俺だって、つれてこない方がいいのはわかってるさ！」
珍しく、アヅマが声を荒げた。
「でも！秘密をばらされても困るし！かといってこの一週間をしのがないと……！」
にわかに、アヅマの語尾がかすれた。
「…？しのがないと、何なの？」
不審に思い、キクカが言葉を重ねた。
『”５日間しのげなかったら、継承権は破棄する”って言ったよなぁ！？王子さんよ！』
二人の頭上から、威勢のいい声が降ってきた。
だが、キクカにはその言葉の意味がわからない。
「何！？なんか言ってるの？」
険しい表情で上空に目をやるアヅマの様子に、キクカは一種危機感を覚える。
「……オバさん、俺のそばから離れないで……」
『そんなお荷物まで抱えやがって！早くインテュバルを放棄したいと見える！はっはっはっは！』
声は止まない。
それどころか、次第に大きくなっている。
近づいていた。

「更科くん！ねぇ！何なの！？」
悲鳴にも似たキクカの叫びに、アヅマは答えた。
「俺は、あいつらと約束したんだ。もし、俺が5日間、地球時間で約一週間逃げ切ったら」
「逃げ切ったら……？」
「俺の勝ち。俺が王になって戦争は終わる」
「……もし、逃げ切れなかったら？」
アヅマは、少しの沈黙の後、正直に答えた。
「あいつらはインテュバルを征服し、地球に進軍する……」
「なんで！？」
「俺が知るか！しかも、俺があっちの世界で”力”を使ったなんてばれたら負ける以前の問題だよ！」
また、キクカはアヅマの言葉に逡巡する。
「……更科くん…の”力”って瞬間移動……とか？」
「は？何言ってるの、刺客を倒した時に……」
そこまで言って、アヅマも止まった。
「……もしかして、え？なに？オバさん、あの時何見たの？」
「だから、更科くんが人を殴ってたところ……」
「だよね？その時俺、”力”で相手を倒したんだけど……」
「知らないわよ！暗かったし、普通に殴ってるようにしか見えなかったし、怖くてすぐ逃げて…」
アヅマの顔から精気が抜けた。
「俺、早まったかも」

異世界への誘拐2

冷や汗を浮かべたアヅマの顔を見ながら、キクカは怪訝そうに頭を傾けた。
『イチャイチャしてる暇あったらオレの相手でもしてくれや！？』
キクカの疑問が消化される前に、二人にはやらなくてはならないことが待ち受けていた。
「逃げるぞ！」
アヅマが号令する。
『オレがお前の首をいただいてやる！』
しかし、二人の行動は遅すぎた。
逃げようと走り出した二人の前に、流れるように降り立つ影が一つ。
コウモリの皮膜に似た、それでいて無数の毛に覆われた3翼が目に入る。
頭とおぼしき部位が、その中心にあった。
「キマキマ！」
キクカは、また深月の小説に出てきた妖獣の名を口にする。
「当たり！…とか言ってる場合じゃないか」
アヅマは、キクカをかばうように前に出た。
キマキマと呼ばれるこの生物には頭と、胴の二つの部位しかない。
頭の部分から生える3つの翼のようなものは、飛翔すること以外に、人間で言う耳殻の役割を果たす。
その全長は、約3メートル。
およそ、キクカ二人分だ。
『オレは運がいいな。一番に王子さんを狩れる…』
キマキマの羽の根本で、何かが振動していた。
カタツムリの触覚のような、ぬめぬめと光沢を放つ振動体。
そこから、声が出ていた。
もちろん、キクカには通じていない。

言い換えれば、こちらの言葉ー日本語もキマキマには通じていない。
「なんて、言ってるの？」
「俺を、殺すって」
「どうするの？」
「さて、どうしたものかな。俺、あんまりキマキマと戦ったことないしな」
「何のんきなこと言ってるのよ！どうやって一週間も乗り越えるつもりだったの！？」
キクカは、信じられないといった風に叫んだ。
「・・・・・・・・・・・・・・・！」
キクカには理解できない”言葉”で、アヅマが何か言った。
ピタリと、キマキマの動きが止まった。
「…？何したの？」
「不動の呪縛を科した」
アヅマが、早口に話す。
「俺、倒す方法知らないからな…。とりあえず動きを封じて……」
そして、キクカの腕をむんずとつかんだ。
「逃げるよ！」
「うわっ…！」
キクカが気構える暇も与えずに、アヅマは彼女を引きずるように走り出した。

「地球で”力”を使うことは禁じられてるんだ」
キマキマから逃げ出した後。
ラグノリアの森の中で。
「どうして？…まって！どうせ秘密がばれるとヤバイとか言うんでしょ！？」
アヅマがキクカを連れてきた理由を話していた。

「まぁ、ね。もし、王家のお偉いさんたちに知れたら継承権を剥奪される」
「…そういう、約束？」
理解力を増したキクカの反応に、アヅマは満足げにうなづいた。
「俺を地球に逃がすのさえ本当は危ないことなんだ。時空を越えるしね」
二人の間に、小さな火が燃えていた。
これも、アヅマが”用意”したものだ。
「あってはならない”力”が、時の流れに及ぼす影響は計り知れない……。とても、危険な行為だ」
「どう危険なの…って、私が聞いてもしょうがないかしら…で？」
「オバさんに…地球人に”力”のことが知られれば、最悪時空が歪むかもしれなくて」
「どうしてそうなるのよ」
少々キクカの理解の範疇を超えだした話題に、不満そうにほほを膨らまして訊いた。
「だって、この”力”は第3の地球じゃ発見されてない…」
第3の地球。
その聞きなれない言葉に、キクカは首をかしげた。
「え？ワケわかんない」
「いや、えっと何て言ったらいいのかな」
「第1、第2があるの？」
この広い宇宙、地球に似た星が幾つかあってもおかしくはないが…。
「ってゆうか、この星、インテュバルは第6の地球…かな？」
そう言って、アヅマが土の上に丸い円を書いた。
その中に大陸を幾つか書き、そこから線を引っ張って「ラグノリア」と「ブルテンツ」を書き入れる。
「ぶっちゃけ、オバさんが生きてる地球の遥か未来の姿…なんだよね」
さらに、この辺が日本だったあたりじゃないのかな。などいいなが

ら、線を引く。
「なんですってー！！！？？？」
「声、でかいから…」
森にいた鳥…のような生物が一斉に飛び立った。
長かった1日が暮れようとしている。

ラグノリアの森の外。
飛び立つ野鳥の群れを目にする人影が、ひとつ…。
不自然な鳥たちの動きに、人影は何かを察した。

地球は、すでに2回生まれ変わり、3度目の世界を構築していた。

「簡単に、これまでの状況を説明しておくね」
アヅマは炎越しにキクカを見つめながら、先ほど書いた地図を靴底で消した。
二人は、学生服のままだ。
革靴でも、スニーカーでもない。
学校指定の、センスがいいとはいえない上履きをはいている。

「俺も学者じゃないから、世界の再構築を詳しく説明しろって言われてもよくわかんないけど」

遥か未来。
6度目の地球、インテュバル。
そこはひとつの統治機構によって管理され、王制をしいていた。
しかし、第6の地球の寿命は尽きようとしていた。

その時、インテュバルで戦争が勃発。
反王統派による「前世界への移住計画」が、王室との溝を深めたの

だった。
激化する戦争の危険から、王統派は現王の後継者である王子を時空を越えた第３の地球へ逃がす。
それは、敵が”力”を使う危険性を冒してまで、王子に危害を加えないだろうと踏んでの事だった。
そして、大臣たちは幼い王子に約束させる。
「もし”力”を使ったり、あなたの正体がばれたら、あなたの王位継承権は剥奪する」
と。
第３の地球ではありえない事態に、時空の歪が生じる危険性があったからだ。

第３の地球で暮らすアヅマの元に、王統派と敵対している派閥の刺客が差し向けられた。
そして、アヅマはインテュバルの現状を聞く。

戦火により荒廃した土地。
溢れ出す難民。
妖獣たちの異常繁殖。

アヅマは、ある交換条件を元に停戦を呼びかけることにした。

「５日間で、俺を殺せたなら俺たちの負けだ。移住でも何でもすればいい。だが…」

もし、俺が生き延びれば戦争は終わり、移住計画も白紙だと。

反王統派はその好条件を受け入れる。
まだ子供ともいえる王子一人殺すのは、簡単だと踏んだからだ。
しかし、刺客たちは連絡係を除いて全員が倒されてしまう。

アヅマの力は、侮れないものだった。
その現場を目撃したキクカ。
アヅマは、大臣たちとの約束から、危険を承知でキクカを監視しようとする。

しかし、敵との約束を守り、キクカを監視するためには、彼女を第６の世界に連れて行くしかなかった。

「もう、この世界も長くはないと、学者たちは予測している。その予測は、ほぼ事実だと言って過言ではない」
「…この世界を捨て、人類が助かるためには移住を？」
「そういうバカげた考えをする輩がいたせいで、大きな戦争になってしまった」
キクカは、似たようなストーリーのＳＦマンガを思い出していた。
しかし、多くのストーリーは宇宙への旅立ちを選択している。
この世界の学者たちのように前世界へ移住しようなどと考えなかったのは、時空の壁があるからだ。
「特殊相対性理論とか、オバさんは知らないかもしれないけど…、そういう技術が、いわゆる”魔術”の解明によって大きく進歩しているんだ。うちの世界は」
小難しい用語は理解できなかったが、キクカは黙ってアヅマの話を聞くしかできない。
キマキマを封じたあの力も、火を用意した技も、きっと解明された魔術に関係してるに違いない。
「まぁ、なんでもいいんだけどさ。ごめんね、関係ない争いに巻き込んじゃって」
アヅマは殊勝に謝罪の言葉を口にする。
「とりあえず、今夜は眠ろうか」
「…ここで！？」

また何かに襲われるかもしれないというのに。
「あ、大丈夫。夜はこの火が守ってくれる」
それも何かの約束か、と訝しげににらむと、アヅマは「大丈夫大丈夫」と無責任な風に返事する。
「あの、布団とか」
「布団…なんていらないでしょ？」
まぁ確かに暖かくて、凍死などという不穏な死にかたはせずにすみそうではあるが。
王子様って、もっとサバイバルには不慣れなもんじゃないのかと、キクカは恨めしそうに視線を投げる。
キクカの視線には気付かないふりをして、アヅマは
「じゃ、おやすみ」
とのんきに寝転がった。

キクカを連れ、インテュバル・ラグノリアでの1日を乗り切ったアヅマ。
1日目が終わろうとしていた。

異世界での現実1

襲われるのではないかという緊張もあって、キクカはまったく眠ることができなかった。
朝日が昇っていくのを、少し亡羊とした気分のまま眺める。
消えることの無かった炎は、やはりアヅマの特殊な力が作用しているのだろう。
炎の反対側で、アヅマが寝息を立てている。
この世界の統治者の後継者だというアヅマ。
「…それって、俗に言う王子様、よね」
しかし、サバイバルに慣れているのか、第3の地球に疎開して野性的になったのか、眠るアヅマはキクカがイメージするような王子の姿ではない。
深槻の小説にも王家や貴族が登場するが、そこはやはり女子受けしそうなキャラなのである。
豪奢な宮殿に住み、美しい容姿を持ち、数々の陰謀を乗り越える。
統治者という存在が深月の小説のままであれば、そんな王宮を継ぐ存在。
「あれ、オバさんもう起きてたの？」
まるで、自宅の部屋のベッドから起き上がるような。
伸びをして、あくびをしながらアヅマが「おはよう」と続ける。
返事をしないキクカをもう一度よく観察して、
「まさか、寝てないの？」
咎めるような口調で問いただした。
「あ、あのね！普通の女の子はこんなサバイバルできないの！」
声が上ずってしまったが、負けじとキクカは反論する。
目の下に浮かぶ疲労感が、アヅマに分からないはずはない。
少し、アヅマは後悔する。

「…抱いて眠れば良かった？」
「なんでよ！あなたどんな生活してきたのよ！」
極力優しく改善案を提示したつもりだったが、否定と拒絶の反応が返ってくる。
「極普通の高校生活を送ってきたつもりなんだけどね？」
真面目なのか不真面目なのか、さっぱり分からないアヅマの回答。
だが、こんな状況におかれてか、「普通」の生活は過去形の表現となっている。
「まぁ、いいや」
起き上がると、アヅマは衣服に付いていた土埃を払う。
そういえば、制服のままだ。
「森を出よう」
「どこへ行くの？」
「人のいるところ」
「街が、あるの？」
「そうだよ、知っているんじゃないの？あの人が小説に書いたから」
アヅマがいう「あの人」とは、小説家深槻左九夜のことだ。
彼の書く小説の情報は、アヅマが提供したものだという。
それが、この世界の話だということは、キクカにも良く分かる。
小説として紡がれる文章から、いつも想像していた。
ラグノリア、ブルテンツ、ディッヒーテエルン、シンクー。
大きな都市と、古代ギリシャのポリスのような街。
空を支配する妖獣は、天帝ゼウスのように他をなぎ倒し、海を住処とする魚人はポセイドンに引けをとらぬ勇猛な種族。
そして。
「大地に身を寄せる人類は、調停者として世界の管理を行い、街を守る…」
「正解。本当にあの人の小説、好きなんだね」
まるで喜ばしいことではないような。
アヅマは複雑な表情でキクカを見る。

キクカが口にした言葉は、小説の一節だ。
それを聞き、正解と言えるほどに、アヅマも彼の小説を読んで覚えているのが想像できた。
「さ、明るくなったし、早く街に行こう」
しかし、自分がふった話題にもかかわらず、それ以上の追求を拒むように背中を向けた。
太陽が昇る方角とは反対に歩き出す。
ここが地球の未来の姿で、かつ太陽系の星になんの変容もなければ、西に向かっていることになる。
「ちょ、待ってよ！」
キクカは、小走りでアヅマを追いかけた。

キクカたちが去った後。
煙だけを吐く炎の跡に、若い少年の姿があった。
緑色の髪は短く切りそろえられ、張りのある肌に整然と配置された目鼻は、ローマの彫刻のように計算された美しさを表現している。
瞳もまた深い緑で、長いまつげの先が淡くピンク色をしていた。
少年は、くすぶる”力”の跡を指の腹でそっと触った。
「…王子の気配…」
自らの推測を確信とするため、つぶやく。
薄い唇が、笑みの形に弧を描く。
広い森を歩いてきたのか、ローブの端々に木の葉や草の種が引っ付いている。
ばさり、とそのローブを翻すと、草木の分身たちだけが空気に舞った。
少年の姿は、風のように消えていた。

異世界での現実2

なんとなく無言になった。
いくら理由を説明されても、納得できない。
王家と、アヅマと、反王統派との間の「約束」。
アヅマはそれをかたくなに守り、守らせている。
そんなにも「約束」が重要視される世界。
「オバさん、大丈夫？」
アヅマが振り返った。
「大丈夫じゃない」
「正直だね」
笑うアヅマからは、思ったような緊迫感はない。
「ごめんね。ちょっと、俺がいたころよりも状況が変わっているみたいだから」
「そうなの？」
「ん、結構長いこと、オバさんたちの世界にいたから」
「…どこに行くか、分かってるの？」
「とりあえず、フテリュアルア」
それは、王都の名だ。
まだ、森は続いている。
キクカが想像していたラグノリアの森は、こんな陰鬱なものではなかった。
鬱蒼とはしているイメージだったが、なんだか暗い。
この世界の、戦争の影響が大きいのだろう。
「ここから、どれくらいかかるの？」
そうキクカが質問した直後、
「もう、たどり着けないよ」
キクカにも言語と分かる、若い男の声が二人の足をとめた。
「見つかったか…」

後方から、長いローブをひるがえした「緑」の青年が歩いてくる。
暗い森の色とは、まったく別物の「緑」を持つ人。
「…誰」
きれいだった。
まるで彫刻のような、芸術作品のような人間。
「変な匂いがすると思った。なに連れてるの？」
「…ヴュラ…」
アヅマの口から、得体のしれない言語が飛び出す。
きっと、この世界の言葉。
キクカには理解できない言語で、ふたりは会話を続ける。
知り合いのようだ。
キマキマの時のように、逃げることも攻撃することもない。
「女連れなんて、余裕だね？大臣たちは知っているの？」
「何を？この子の事？」
「…いや、俺たちと勝手な約束をしたこと」
「……」
「あ、知らないんだ？」
緑の青年は、キクカたちより少し年上に見えた。
どんどん、距離が縮まる。
「俺たちはどっちでもいい。なんで5日なのかは知らないけど、向こうの世界に影響がでないようにって、戻ってきたのはこっちに好都合」
「そうかな？」
「そうさ。向こうの世界の元素は操りにくい。向こうで俺たちに勝てたからって、こちらでもそううまくはいかない」
緑の男が片手をわずかに広げた。
バンクルがきらりと光を弾き、乾燥した細い音が静かに広がる。
何かが、空気を切り裂くように…。
「オバさん、伏せて！」

アヅマの命令に、体が素直に反応した。
頭の上を、「ひゅん」と何かが高速で通り過ぎた。
ドドド。
バギバギ。
「え」
轟音が響き渡る。
森の木々が、「切り倒され」ている。
緑の男に視線を戻すと、バンクルから、細い糸が放たれていた。
曇天に突き上げられた右手から、白く、銀にも輝く糸が周囲に光を残す。
それが、木を切り倒したものだと、原因と結果が結び付く。
「な、何なのー！？」
「彼はムルヒ・ビュラ。原子の糸を操る暗殺者だ」
そんな説明いらない。
「王子、あたなに僕をとめられるかな？」

一閃。

踏み込みと同時に右手の角度が変わる。
鮮やか。
まるで舞踏のようだ。
アヅマはキクカの腕をつかみ上げ、強引に自分の背中に隠す。
「オバさん、俺から離れないで」
キクカの視界が、アヅマの背中でいっぱいになる。
時と場合を考えればときめいてなどいられないが、ふわりと漂うアヅマの香りに、心臓は勝手に鼓動を早める。
また、アヅマが知らない言語で何かを紡ぐ。
ゴゴ。
大地がうねる。

ヴュラの優雅さとは対照的に、乱暴なまでに土の防御壁が立ちあがる。
しかし、土は土。
鋭い糸の刃はたやすく壁を切り刻む。
「護りでは、俺に勝てないよ！どうする！」
劣勢に、アヅマの表情が曇る。
何かをためらう、そんな表情。
「更科くん！動き止められないの！？」
「キマキマ程度なら使える呪文だけど、ヴュラにはかけられない。早すぎる」
キクカにはその理屈は分からなかったが、できないということは、逃げることも難しいのだと理解できた。
「どうするの！」
キクカを後ろにかばって、アヅマの動きは鈍い。
相手が、ヴュラだからだ。
閃く糸を土壁で防ぎながら、じりじりと後ずさる。

「その女、そんなに大事なの？」

ヴュラのバンクルに、糸が静かに戻っていく。
「…」
「答えられない？」
ヴュラの美しい顔に、す、と影がさした。
「じゃあ、その子がいなくなったら、本気で俺の相手してくれるかな？」
「なんだって？」
にやり、と。
下げられた両腕から地下にむけて無数の糸が伸びた。
勢いでローブが巻き上がるほどに。
息をのんだ。

きらきらと輝いて。
まるで天使のような。
美しさ。
「やめろ！」
地中を這った攻撃的な糸が、アヅマとキクカの直下から進軍する。
足場を崩すことなく、アヅマの背からキクカの体が離れた。
糸で作られた鳥かご。
囚われるキクカの意識には、それは美しい光景に映った。
だが。
糸に触れる部分が裂ける。
制服のスカートが、シャツが、そして肌が。
「いたっ」
「オバさん！」
伸ばされたアヅマの手から、キクカを閉じ込めた糸の鳥かごは器用に距離をとる。
そして、その鳥かごは徐々にその半径を小さくしていく。
結末を想像して、キクカは悲鳴を上げるしかない。
「やだっ！いやーぁっ！」
「女の悲鳴って、いつもうるさいよね。ま、むさくるしい男よりマシだけど」
「ヴュラ！」
「何？」
「殺すな！」
アヅマの口から発せられた懇願を、ヴュラは満足そうに微笑んで受け流す。
「じゃぁ、僕を殺すしかないよ？」
二人の間に交わされる会話の時間にも、キクカを閉じ込める鋭利な糸は縮み続ける。
美しいと思ったその糸の輝きは、すでに凶器以外の何物でもなく、キクカを襲う冷たい刃。

ぬるいキクカの血が、糸を染める。
「助けてっ」
キクカの悲鳴がアヅマの心に刺さる。
ぎゅ、とアヅマのこぶしに力が入った。

「・・・・・・・・！」

キマキマの時とは違う、短い言語の連なり。
土が盛り上がったのとは違う、軽い振動。

糸の動きが止まった。
土が。
キクカの足元の土が抉れて消えた。
キクカを包む檻が倒れる。
「大地に愛されて、生まれた」
ぼそりと、ヴュラが呟く。
「君のためなら、この世界は何でも言うことを聞く」
糸が主人とのつながりを断ち切られ、煌めきを失った。
そして、大地に溶け込むように消える。
「…大地が、世界が、僕は君に必要ないと…」
ヴュラが何を言っているのか、キクカには分からなかった。
だが。
ヴュラの体を貫く黒い塊が、何を意味するのかは分かった。
「その女の、何が君に必要？」

「…そうだね。俺の秘密を知る唯一の人」

「殺してしまえば、秘密は永遠だ」

「そう、だね」

「あなたに、この戦いをとめる力はない」
「…そうかもしれない。でも、約束した、だろう」
ヴュラが笑った。
「自分の命と世界、同時に守れるものか」
「俺には、大切なものだ」
そして、ゆっくりと。
笑みの形の口元が鮮血で濡れる。
それは、キクカと同じ赤。
「世界の終末に立てなくて、残念だ…」
キクカは、人の命が消える瞬間を。
初めて目の当たりにした。

異世界での旅路1

目を閉じることが出来なかった。
見たくないのに。
目をそらすべきだと、理性が訴えている。
顔を背けることも出来なかった。
あまりにも美しく。
まるで彫刻のようで。

天に向かって伸びる黒い槍。
地面からそそり立つそれは、土で出来ている。
酸化も、硬化もしていない赤い血潮が、装飾のように凶器を彩る。
それは。
人の体を貫き。
人の命を奪い。
自己を主張する。
キクカは、自分の体にも流れる血液を凝視した。
やっと、「彫刻」から目を離す。
痛みが、沁みる。
「オバさん、大丈夫？」
「いやっ」
キクカは、触れようとしたアヅマの手を払った。
「…ごめん、オバさん」
謝罪を聞いても、一体何に対して謝られているのか解からなかった。
「死んじゃったの？」
細く、吐く息が言葉になる。
「ねぇ、あの人、なんで死んじゃったの？」
「…ごめん」

「なんで、謝るの？」
事実を。
「オバさんに、むごいものを見せてしまった…」
「あたしが、助けてって、言ったから？」
原因を。
「…違う。方法は別にもあった…と思う」
「……」
沈黙。
「立てる？他の追ってが来ないとも限らない。先を急ごう」
ゆっくりと差し伸べられる手。
キクカはそれを頼らず立ち上がった。
キクカの様子を確かめ、アヅマは口の中で短く何かを唱えた。
ヴュラを貫いていた土が崩れ、代わりに彼を包む繭のような形になる。
そのまま、静かに大地は平坦になった。
埋葬されたのだと、キクカは悟る。
いろいろな考えが頭をよぎったが、形になることはなかった。
「更科君…ごめん」
衝撃が大きすぎて。
この世界で頼れるのはアヅマだけで。
「行こう…王都へ」
キクカに何かを選択する余地はなかった。

二人の移動手段は徒歩である。
2日目の、おそらく昼過ぎ。
時間の感覚がわからない。
ただ、お腹がすいている。
そういえば、朝食も食べていない。

思い返せば、夕食も食べていない。
緊張の連続で、空腹を忘れていた。
まだ、ラグノリアの森は続いている。
食べられそうな獣や、木の実があるかなど気にする余裕もなかった。
ぐう。
お腹がなる。
「もうすぐ大きな道に出るよ」
久しぶりに聞いた気がするアヅマの声は申し訳なさそうな苦笑まじり。
恥ずかしさで、顔が紅潮した。
また、会話がなくなる。

しばらくして視界が開けた。
「わぁ…」
舗装はされていないが、きちんと踏みしめられ固められたような道に出た。
学校の廊下よりも何倍か広い。
轍がある。
「この道、王都に続いているの？」
キクカの記憶が確かならば、ラグノリアと王都・フテリュアルアはかなり近接している。
「直接は続いていない。この道の終着点は聖都・シンクーだよ」
小説に描かれたシンクーは、大陸宗教の聖人が祭られた大聖堂を有する、インテュバル有数の大都市だ。
「ラグノリアの西端はシンクーのあるコアンマサリー、その先にフテリュアルアがある」
「更科君って、長い間地球にいたのに…よく覚えてるね」
シンクーが都市の名前だとすれば、ラグノリアやコアンマサリーとはいわゆる地方の名前だ。
「あの人に…恭介に話をしていたからかな…。それに、ほら俺、色

々教育されてたし」
さすが王位継承者。
並みの教育は受けていないとみえた。
「成績もいいもんね…」
キクカは、アヅマが試験では常に学年トップだった事を思い出す。
「恭介が、俺の話を真面目に聞いてくれなかったら、忘れていたかもしれないけどね」
「そういうもの？」
「それに」
アヅマは続ける。
「うちの学校の保険医、あれ、俺の従者だから。仲間がいると自然に故郷の話にもなるでしょう」
「え！？」
驚いて、思わずアヅマの顔を見る。
「先生もエイリアンなの！？」
「…エイリアンって…」
キクカの表現に困惑し、アヅマはまたも苦笑する。
「俺たち別に普通の人間だよ」
「あんな力使えるのに、普通って言わないよ！」
「やっと、俺の顔見た」
「…あ」
指摘され後ろめたく、うつむく。
「いいんだ。俺も、初めてあんな風に力を使った…」
苦い表情で、アヅマは自分の手のひらをこぶしにした。
何をどうすればあんな力を操れるのか、キクカには理解できない。
だが、地球で使うことを禁じられているという意味は、解かるような気がした。
「ヴュラを、あんな目にあわせたのは俺だ…」

‥‥‥

「弟からの連絡が途絶えました」
緑色の髪の青年が、冷たい石の床に膝まづいている。
まつげ先だけ淡いピンク色。
彼の視線の先には、玉座に似せて作られた豪奢な革張りの椅子に腰かけた中年の男。
「まさか、寝返ったか」
重く、低い声が部屋に満ちる。
その男の髪もまた、同じ緑。
「いえ、おそらく落命したものかと」
「何？」
「僕にはわかります」
「…そうか。王子の仕業と思うか」
「王子が勝手な約定をしたこと、敵に知られていればもしや異なるやもしれませんが…、恐らくは」
青年の強い眼光が、「そうだ」と物語る。
ヴュラと同じ顔をした、青年。
「デュラ」
「は」
「行けるか」
「真実を確かめて参ります」
「殺せ」
「わかっております。父上」

‥‥‥

異世界での旅路２

‥‥‥

舗装されていない道を歩く事が、こんなにも辛いとは。
キクカの足は、既に棒のように固くなっていた。
だが、歩かなければ、どこへも進むことができない。
「オバさん、大丈夫？」
休み時間に校舎の廊下を歩くような足取りのアヅマが、ふとキクカを振り返る。
「何度も言うようですけど、大丈夫じゃない」
もう、気を遣う気力もない。
キクカは、アヅマよりも１０メートル程歩が遅れていた。
だが、その距離が大きく離れないのは、アヅマがキクカを気遣っての事だというのは、キクカ本人にもうすうす分かっていた。
「なんで、そんなに体力あるの…」
アヅマに聞こえるか聞こえないかの独り言ではあったが、彼はそのセリフをきっちり拾う。

「オバさんが運動不足なんじゃないの？」

ちょっと、イラッ。

「シンクーに着いたら知り合いを頼れると思うから、もう少し我慢して」
もう、疲れすぎて空腹も忘れそうだ。
あの森での出来事も、はるか昔の出来事のように思えた。
「ねぇ、更科くんは、なんであんな変な力が使えるの？」

「変かな？」
「あたしたちの地球でも、同じように使えるんでしょ？」
「同じ、とまではいかないけど。あの地球の元素は俺の従者ではない」
「…はい？」
アヅマは、一瞬説明しようか迷って、だが無言で歩くよりもと話し始める。
「俺は恭介にも話していない事があってね」
「うん、小説では更科くんみたいな力を使う人いないもん」
「この世界では、元素を操る能力を持った人種がいるんだよ」
キマキマ等の幼獣がいる世界だ。
今更何を言われても驚きはしない。疲れのせいもあったが。
「元素って言っても、化学で習うそれとはちょっと違うんだけど…」
「いい、難しいことはいい」
キクカはうなだれて首を振る。
「…わかりやすく言うと、俺たち一族はは大地に属する元素を守護に持っているから、世界の統治者をやれているわけ」
「全然わかりません」
言葉を吐き出すと、呼吸が乱れて余計疲労が貯まる気がした。
アヅマには苦でなさそうだ。
「大地の力を借りることができるとでも言うのかな…。大地に属するものには、土と木と、風があって、この点はオバさんたちの世界の理と違うんだけど」
「あー、陰陽五行みたいな？」
「そうそう、それとはちょっと違っててね、この世界では、大地と光と水しかない」
「…」
言いよどみ、キクカは質問する。
「さっきの…緑の人は？」
「……ヴュラは、一族の傍流なんで、ちょっとは力が使える。地の

能力を少し持ってる」
「本家であればあるほど、力は強いの？」
「そう。俺なんかは直系も直系だから、受け継いだ技術も、能力も高い」
「ふーん」
「分かった？」
「…なんとなく」
「俺みたいに力を持って…、つまり、大地か光か水の守護を持つ一族が、この世界では尊敬され、力を持っているんだよ」
「ふーん」
「オバさん、疲れてどうでもよくなってない？」
いつの間にか、アヅマが聞キクカの横に並んでいた。

「ね、オバさんは恭介の小説の登場人物だったら誰が好き？」
いきなりの話題転換。
だが、話し続けていれば少しは気が紛れるような気がした。
アヅマへの恐怖心も。
「ユースミカエルか…レオトリテネス」
キクカが挙げたキャラクターは、どちらも美形の剣士だ。
「そっちかー」
「何。そっちって」
「俺は、サザンティが好き」
アヅマの言うキャラクターは、大陸の大商人で、世界の流通と経済を動かす力を持つ男だった。
「やだ、サザンティって野心家なんだもん」
「男は野望をもってナンボじゃない？」
「男はお姫様守ってナンボでしょ！」
「姫って、フェレン・ミーナはちょっと弱すぎでやだ」
「お姫様はいいのよ！か弱くて、守ってあげたーいってくらいで」
「ちなみに、書きかけの原稿だとユースミカエルとくっつく」

「やだ！ちょっと何ネタバレしてんの！信じらんない！」
突然のアヅマの暴挙に、キクカの精神が沸騰する。
続編を楽しみにするものにとって、ましてや主人公であるフェレン・ミーナの恋の行方の暴露というネタバレは許される行為ではない。
自然、声音が大きくなる。
「あー、今のは聞かなかったことにしたいー！いやー無理ー！」
「なんで？もう話しちゃったよ」
「しかもユース！あああ！なんでよ！この前ミーナの窮地を救ったのはレオじゃないの！最新刊で何があったのよ！」
「あれ？まだ最新刊読んでないの？」
「ええ、ええ、誰かさんのせいで買いそこねましてね！」
「あー、そうか。最新刊読めばわかるよ」
「きーっ！！」
悔しさのあまり、キクカは地団駄を踏んでしまっていた。

「あ、オバさん、見て」
「何を！」
思わず言葉が強くなってしまったが、アヅマが示す先に表れた景色を見た次の瞬間、キクカは息を飲んだ。
想像していたよりも、美しい聖都の姿がそこにあった。

「――きれい」

白い城壁の周りに、堀がめぐっている。
小説の通りであれば、それは人々の生活用水であると同時に都を守る結界。
堀の周りは緑が豊かで、日本でもよく見るようなランニングコースのように整備されている。
「あれが、シンクーの入口？」
万里の長城は見たことがないが、まさにそれを思い出すほどに長く

続く白亜の壁。
轍が、その城壁に吸い込まれるように伸び、途中で石畳に変わる。
堀を渡す橋は、同じく石造りだ。
「そう。さ、もう少し頑張ろう」
笑顔で。
先に歩き出すアヅマ。
頑張ろう、と言ってくれるその優しさに、少し、ほんの少しだがキクカは救われるような気がした。

異世界での旅路3

聖都・シンクー
水の結界に守られた、白亜の都市。
小説の通りならば、そこを治めるのはコアンマサリーの盟主と呼ばれるティエラ家。
さっき話題になった、ユースミカエルの一族だ。
「…ということは、もしかしてユースミカエルは水を守護に持っているとか」
歩きながら、キクカはぼそりと声にだした。
確か、大陸宗教の神は、大地を潤す水の神だったはず。
「あー、そうそう。ずっと考えてたの？ま、実際ユースじゃなくてティエラ家が、だけど」
足元が石畳に変わり、城門の大きさが目視でも実感できるようになった頃。
「なんか、あたし、初めて来た土地なのにこんなにいろいろ知ってるって、実はすごいんじゃないかしら」
変な気分だ。
海外旅行をする前に、パンフレットを一生懸命読んで観光地の勉強をしてきたみたいな。
「もしかして、ユースミカエルのモデルになった人がいるんじゃない！？」
その考えに行き着き、テンションが上がる。
「…今から会いに行く知り合い」
アヅマは、複雑そうな表情。
「え！ホント！？」
「オバさんって、本気でユースが好きなんだ」
「何、いいじゃない。そういえば、先生は誰が好きなんだろう」
「…多分、フェレン・ミーナじゃないかな？」

先生とは、深月のことだと理解し、答えを返す。
「あー、先生の好みって繊細でかわいらしい女の子なんだ」
「…多分。聞いたことはないけど、扱いが特別っぽいし」
挿絵にも口を出したらしい。
あとがきに書いてあった。
「更科くんがモデルにした人、いるの？」
「いや、女の子との付き合いってさ、王宮では滅多にないから…。
ミーナは恭介の創作」
「へぇぇ」
そんな話をしていると、城門の目の前までたどり着いた。
キクカは疲れも忘れるほどの高揚感に包まれていた。
城門に見張りはいない。
それほどに、結界が信頼され、また機能しているという事だ。
「これ、どうやって開けるの？」
素朴な疑問。
城門には、重そうな金属の扉があった。
アルミのような色をしているが、高さがかなりあり、３階建てのキクカ達の校舎よりも高いように感じられる。
「ん？こうやって」
す、と。
アヅマが手を伸ばした。
大地と水平に伸びたその腕が、扉に触れる。
パチ。
静電気のような音がキクカの耳に届いた。
すると、目の前の城門がみるみるうちに透明になっていくではないか。
「す、すごい！」
「これは幻覚なんだ。シンクーは何者も拒まない。入る理由のあるものは、必ず入ることができる」
「悪い人たちも？」

「そう。でも、悪い人達が入ろうとすると、この扉は重く感じられるって聞いた」
キクカの疑問に答えながら、アヅマが苦笑する。
「何？」
怪訝に思い、見上げる。
「いや、悪い人って…語彙が幼いなと思って」
口元に拳をあて、小さく笑う。
「ちょ、何よー！」
「いや、ミーナばりに可愛いんじゃない？」
そして笑い続ける。
なんだか恥ずかしくなる。
ただ、キクカには「語彙」という単語の意味もわからなかった。

城壁の中に入ると、そこはヨーロッパのような街並みだった。
実際のヨーロッパを見たことのないキクカには、なんとなくそんな雰囲気、程度の認識ではあったが。
「フランス映画の世界みたい」
キクカのその感想を得て
「…どのフランス映画だろうね」
ひねくれた所見を述べるアヅマ。
さっきの”幼い語彙”が尾を引いている。
そんなアヅマの態度に頬を膨らませ、キクカは対抗して「全部だもん」と言う。
面白い遊び道具をを見つけた犬のような目で、アヅマはキクカを眺めた。
実際。
キクカの反応が面白くてたまらないのだが。

異世界と現実の間

「オバさんって、こんなに面白い人だったんだ」
「…」
そういえば、アヅマは学内でも有名人で。
ただ、それだけで。
クラスも違えば、共通点など無いに等しく。
キクカは普通の成績だったし、ライバルと意識することも無く。
かっこいいからと、好きだったわけでもなく。
見た目がチャラチャラしているせいか、近寄りがたく。
「…更科くんって、なんでそんな格好してるの？」
「は？また急な話題転換だね」
「あ、いやえっと」
自分でもなぜそんな質問をしたのか分からず、キクカはうつむいた。
白い石の道が、キラキラと微小な光を照り返している。
「王子様っぽくないでしょ？」
アヅマの回答。
ぱっと顔を上げると、アヅマの微笑みが視界に映る。

――ドキン

十分、王子様だと思う。
そうは言えなかった。

「さて、まっすぐティエラ家に行きますか」
追っ手の心配がないのか、シンクーに到着したアヅマはリラックスしているように思えた。

■■■

「三月さん、では後のことは警察にお任せすると言うことで…」
校長に促されて、三月は席を立った。
既に、警官が数名派遣されていた。
これから現場検証と、事情聴取を受けなければならない。
養い子とその学友の失踪。
アヅマは三月にとっては、大切なインスピレーションの泉である。
協力は惜しまないつもりであった。
キクカの両親も、同じく席を立つ。
「僕が言うのもなんですが、お気を落とさないよう…」
キクカの母親は、三月に深々と頭を下げた。

応接室を出て、廊下を歩く。
放課後の校舎は、静かに夕暮れを待つ。
事件のせいか、グラウンドには自主練をする学生もいない。
「…事件、ね」
窓の外を眺めながら、三月は独白した。
どこまで話そうか、と最初は迷ったが、あらかた打ち明けた。
アヅマのつむぐ世界の話。
誰も、それはファンタジーだと信じて疑わない。
学校でも成績優秀のアヅマを、誰も疑わない。
女生徒と2人の失踪でも。
「あいつ、こういう事態を想像していた、とかな」
「…あなたは予想されていたのですか？」
ふいに、かけられた問い。
廊下の柱に半ばもたれかかるように、保険医が立っていた。

「えっと、あなたは確か…」
「この学校の《保険医》です」
「ああ、最後に2人を見たという方ですね。あなたもこれから警察へ？」
「ええ、長い夜になりそうですね」
「…彼らには、もっと長い夜…いや5日間になるでしょうね」
「ご承知でしたか」
「昔から、あの世界では5日が鉄則でしょう。この世界の政治では、5日では何もできやしないというのに」
保険医が、苦笑する。
アヅマの護衛として、一緒にこの世界に来た彼女。
たった2人の仲間。正確には従者と主の息子。
アヅマがいつかインテュバルに戻った時、王に恥じない教育を施してきた。
そして。
アヅマは思いもよらぬ産物を世界に残してしまった。
三月の小説という形をとって。
「これからも、アヅマをよろしくお願いしますね」
三月はそう言って、頭を下げた。

‥‥‥

異世界での休息1

‥‥‥

「ここがティエラ家だよ」
そう教えられ見上げた門扉は、遥か天を突き刺すかと思われる程に高い。
「あ、これも幻影だから」
じっと上空を見上げるキクカに向かって、アヅマはにっこり笑顔を貼り付けた顔で諭す。
「…」
そうですか。
なんだかがっくり。
キクカは何にがっくりなのか、自分でもよくわからなかったがとりあえず視線を前へ戻した。
「インターホンとか、ないよね」
「何を言ってるの。それくらいの技術はありますよ」
言って、アヅマがなにやら門扉の中心部分に触れる。
チチ、と静電気がはぜるような音がし、どこからともなく
「いらっしゃいませ、お客様」
そう若い女性の声が聞こえた。
ゆっくりと、門扉が消える。
「うそ！？」
「オバさん、実は結構この世界って高度な科学技術持ってるんだよ？」
アヅマのその発言は、キクカが体験したこれまでのインテュバルの状況ではにわかに信じがたい。
そもそも。

小説にもそんな記載はなかったはずだ。
「これって、科学なの！？」
どちらかというと、魔法の類のように思われてならない。
「あれだよあれ、ｉ－ｐａｄとかと一緒だよ」
「？？？？」
そう言われても、何が一緒なのかわからない。
「タッチパネルに指を乗せると、反応するでしょ？あれもまるで魔法みたいじゃない？」
「…そういうものなの？」
「高電位帯の地場が形成されてて、反発で侵入を防いでいる。んで、鍵となる部分に静脈を登録させておくんだ。その認証が鍵となるってわけ」
「…へぇぇ」

ｉ－ｐａｄがどんな原理でタッチパネル操作なのかも理解していないキクカに、ティエラ家の鍵の話が理解できたかは定かではない。

ひるむことなくティエラ家の敷地を進むアヅマ。
アヅマの後ろにくっついて歩きながら、あたりをきょろきょろ見渡すキクカ。
ほどなくして、家の入口らしきものが見えた。
そこに、背の高い男の姿があった。
ちら、とアヅマの顔を伺う。
アヅマが、穏やかな笑みを浮かべている。
対して、長身の男は一見して無表情だ。
「…これはこれは…、見違えましたね」
「あー、うん、わかる？」
「認証画面にあなたの名がでたので、まさかとは思いお出迎えをしに来ましたが」
「うん。久しぶり」

「色々と聞きたいこともありますが、特にそのお嬢さんの話など。
まあ、お入りください」
男は、左腕をわずかに広げて歓迎の意を示した。
「行こう、オバさん」
アヅマに誘われ、キクカは緊張する足を頑張って動かした。

玄関らしき空間を通り、広間へ通された。
調度品は、なんら現代のものと変わらない。
豪華なカウチソファーと、ロウテーブル、天井から吊るされた照明。
毛足の短い絨毯は、織りのデザインが細やかで美しい。
アヅマは、そんな応接セットの中心に、まるで教室の椅子に座るかのごとく腰掛けた。
どこにどうすればいいのかキクカが迷っていると、先ほどの長身の男性が優しく
「こちらへお座りなさい」
と声をかけてくれた。
「あ、ありがとうございます」
ちょこんと頭を下げ、示された場所へ腰掛ける。
男性は、立ったまま話始めた。
「そういえば、軍部のような格好をしていますね？」
「ああ、これ制服」
アヅマが寛ぎモードで答えを返す。
二人の雰囲気からして、旧知の仲のようだ。
「ほう？１０年近く表舞台に出てこなかったのは、軍部にいたからですか？」
「違うって、分かっててその質問？」
「では、問いを変えましょう。そのお嬢さんは？」
「…俺の秘密を知る人間」

「ほう？素性を、という意味ですか」
「まぁね」
キクカの脳裏に、まさかという思いが浮かび上がる。
長い黒髪をゆったりと括り、パオのような袖口の、明時代の中華服に似た衣装を纏う男性。
教養と上位に立っている事を悟らせる癖のある喋り方。
ここは、コアンマアサリーの盟主、ティエラ家の屋敷。

――まさか。

「お嬢さん、お名前は？」
「お、木場（おば）キクカです」
「キクカ。古来の花の名ですね。私はユーキと申します」
「…ユースミカエル…」
「はい？」
アヅマが、隣で笑いをこらえている。
だが、そんなことよりも気になる人物が目の前にいる。
ビジュアルこそ違えど、立ち居振る舞いの印象は深月の小説に出てくるユースミカエルそのものだ。
「あ、いえ、その」
「ユースミカエルとは、私の幼名ですね…？」
男性が、ちら、と目線だけアヅマを向く。
アヅマは笑いをこらえるのに必死そうだ。

心臓が止まるかと。
絶叫が口をついて出てきそうなくらい。
笑ってなんかいる場合じゃない。

キクカにとっては、そのくらい大好きなキャラクターなのだ。
そのモデルが今目の前にいる。

「あああああ。失神してしまいそう…」

言って、キクカの視界は真っ黒になった。

「え、ちょっ…オバさん！？」

異世界での休息2

カモミールのような、爽やかな香りがした。
頭の芯が重い。
目を開けたいのに、動かない。
誰かに、押さえつけられているかのような苦しさ。

「ん…」

かろうじて、柔らかな布団の感触を知る。

――あぁ、そうだ保健室であたし…

「えっ！？」
がば、と。
一度に記憶がよみがえり、反動かのようにキクカは上半身を起こした。
そこはホテルのような部屋。
「あれっ？」
動悸が激しかった。
「大丈夫ですか？」
傍らに、ユーキとよく似た黒髪の女性が座っていた。
「あの…」
「こちらの国の言葉はお解りになるのですね」
そう言って、女性は柔和な笑みをたたえる。
「あれ、そういえば…」
森で襲われた時の緑の青年の言葉は、解らなかったのに。

キクカはヴュラの最期を思い出し、胸を押さえた。
「苦しいのですか？」
「あ、いえ。大丈夫です」
「あなたは…王子のご学友だとか…」
王子、と言われ一瞬ピンと来なかったが、すぐにアヅマの事だと悟る。
「はい、あのあまり仲が良いわけではないんですけど」
「あら、そうでしたの？」
なぜか恐縮してしまう。ユーキに似た輝かしい容貌に。
「申し遅れました。わたくし、兄ユーキからあなたの看護を頼まれました、アナテイシアです。ご用はお申し付けくださいね」
「あ、木場キクカです」
上品な挨拶に、さらに恐縮してしまう。
「ユーキさんの妹さん…なんですか。ということはここは…」
そうだ。
ティエラ家を訪問し、小説内でも大好きなキャラクターであるユースミカエルのモデルとなった人物に出会って興奮してしまったのだ。
「ええ、我がティエラ家の一室です」
「や、すいません、なんか」
「いいのです。お体に負担がかかっていたようですね」
思い返せば、とんでもない展開に巻き込まれていたために、いつも以上のストレスがかかっていたのだろう。
アナテイシアが優美な動作で立ち上がった。
ふわりと、またカモミールのような香りが漂った。
――この人の香りだったのか…。
そう思っていると、目の前に何やら飲み物が差し出された。
「王子が、何も食していないからまずは胃にやさしい温かいものを」
見ると、ミルクティーのような色をしている。
ふんわり甘い、炊きたての日本米のような薫りがする。

キクカは、その得体は知れぬが体には優しそうな飲み物にゆっくりと口を付けた。

きゅうう。

お腹が、小さく音を立てる。
まるで、今空腹を思い出したかのように。
ぽろぽろと、涙が溢れた。
「キクカさん？お口に合わなかったかしら？」
アナテイシアが、不安そうにキクカの肩に手を添えた。
「違うんです…。とってもおいしくて…」
アナテイシアのカモミールの香りと、やさしい味の飲み物。
穏やかな気が、キクカを包んでいる。
涙が。
押し殺す声を代弁し、流れ続けた。

「で？」
堅い調度品が据え付けられた部屋。
主人をひきたてるそれらの家具たち。
「で、って？」
「何を、隠している？」
ユーキの私室だ。
キクカの前とはうって変わって、王子に対する敬意のない言葉遣いで、ユーキはアヅマに問い続ける。
「あの女のこと、そして世界から消えたと噂されていたお前の突然の訪問の意図だ」
アヅマの前にも、キクカに出されたものと同じ飲み物が用意されて

いた。
しかし、アヅマは口を付けていない。
「なぜ我が家に来た？」
「質問ばっかだなー。幼馴染なんだから、優しくしてよ」
「その髪、どうした？」
「染めたの」
「気に食わないな」
「お前の好みなんて知らないよ」
苦笑しながら、ユーキを見つめる。
「王は…、父上は健在か？」
今度は、アヅマが質問した。
「ああ、今のところは反王党派との争いも膠着状態だ」
「侵食は進んでいるのか」
「…お前、本当にどこにいたんだ？」
「…半ば噂は真実ってこと」
「まさか…」
ユーキはその先を続けられない。
「ユーキ、頼みがある」
「…なんだ」
「俺は王都へ行かなければならない。オバさんを預かってくれないか」
「…何者だあの女は」
「俺の秘密を知り、俺の過ちの為に王とこの世界を滅ぼすかもしれない人だよ」
「…」
その告白に、ユーキは絶句するしかなかった。

異世界での休息3

「お前、何をした？」
アヅマが今まで何をしていたのか半ば理解し、それでも問わずにはいられない。
「技術開発局は、あの装置を半ば実用化しているってことだよ」
「何…？」
「俺は地球に匿われ、そして反王党派も俺を追って地球にやってきたんだ」
「まさか、衝突したのか」
「見付かっちゃったから」
「なぜあんな弱そうな女を連れてきた！過去の世界でおとなしくしていれば良かったものを」
激しく。
ユーキは憤りを隠さない。
「勘違いだったんだって…。俺の力を知った彼女が、やつらに狙われると思ったんだよ。いろいろ事情があるの！」
だだっこのように、つんと鼻を上向けていい訳をする。
「地球で戦うわけにはいかないし、こっちの方が都合いいかなって」
ユーキも、地球で「力」を使う危険性は承知している。
インテュバルのように、大地の栄脈を利用する技術のない第3の地球での影響は計り知れない。
「…まったく…」
ユーキは腕を組み、大きくため息をつく。
「詳しい事情は聞かせてもらえるんだろうな？」
「お前が、オバさんを預かるって約束してくれるなら」
にっこりと。
確信に満ちた笑みでアヅマはそう言った。

「…わかった。お前が何をしようと、あの女の安全を確保すればいいのだな」
「うん、ありがとう」
「お前が帰ってきた理由を聞いてもいいか？」
「うーん、ただ、この戦いに終止符を打つ時期かなって思っただけだよ」
「世界の情勢も知らなかったのにか」
「だって、俺が地球に逃げていても、なにも変わらないじゃないか」
「…なんのために王はお前を地球へ逃したと…」
「俺は、力を封じ俺の存在を隠すためだけに地球へ匿われたとは思ってないよ」
「なに？」
「この世界を救う方法が、あの世界にあったんじゃないかって思ってる」
「どういう意味だ」
「確かに、地球はテラフォーミングなしですぐにでも移住できる最高の星だよ。だけど、今までの歴史も技術も捨てて、おいそれと移住するか？」
「移住よりも世界の調停を行う方がはるかにコストもかからん。それは分かっているから意見の衝突につながり、こんな消耗的な戦いになっている」
「この世界を守りたいのは、父上も同じだと思うんだ…」

‥‥‥

その時。
青年は荒野を行くようなフード付きのマントを翻していた。
デバリーの東。

比較的温暖な気候の都市デバリーに、その格好は似合わない。
しかし、誰も彼を奇異な目で見るものはいない。
その”緑”の青年が何者なのかを知らない者が、この都市にはいないからだ。

ムルヒ家の嫡男、デュラ。
デバリーで最高の権力と資金力を持つ一族に、この都市の誰もが恩恵を受けている。

デュラの後を、馬のような一角獣にまたがった男が追いかけてきた。
「デュラ様、お供いたします」
男は獣から降りると、屈強な体躯を折り曲げひざまづいた。
ガシャリと、重そうに鎧が鳴る。
「お前と騎乗せよというのか？」
デュラは片方の口角を上げ、慣れた口調で男をさげすむ。
「筋肉だけのお前では心地よくもない」
「は」
低頭するだけの男に、デュラは続ける。
「来るならお前も大地に足をつけて歩け」
そして返事を待つことなく再び歩き始めた。
デュラの後を、男は黙ってついていく。
残された一角獣はかすかにいななき、男達の会話を理解していたかのように来た方へ帰った。
「カルバ」
「は」
「俺はこれからこの戦いに決着をもたらしにいく」
「は」
カルバと呼ばれた男は、自分よりもはるかに若い青年に、承知といわんばかりに短く返答する。
「お前の力は当てにせん。だが、俺は勝利する」

どこから湧き出る自信なのか、何に勝利するというのか、そんなことは問い返さない。

「この世界を守り、民を守るのは、王ではなく我がムルヒ家だ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3533n/

放課後のエイリアン

2011年12月15日00時45分発行